

## 5歳児健康診査の実施体制の構築について

越谷市健康づくり推進課

○林里奈 石井睦海 田原智江

川上久乃 内田智子 宮城美由紀

### 1 はじめに

令和5年12月に「母子保健医療対策総合支援事業（令和5年度補正予算分）の実施について」により実施要綱が定められ、令和7年度から5歳児健康診査が開始されることとなった。就学前の5歳児は、集団生活の中で発達特性や行動面、生活面の課題が顕在化しやすい時期であり、健診を通じてこれらを体系的に把握し、支援に結びつける仕組みが重要である。本市ではこれまで、1歳6か月児健康診査及び3歳児健康診査後のフォロー体制を整備してきた。今回、新たに5歳児健康診査を導入するにあたり、現状の課題を整理するとともに、関係機関との連携体制の再構築を行い、健診実施による児の発達および生活面への支援効果について考察したので報告する。

### 2 内容

#### (1) 現状における課題

本市では、1歳6か月児及び3歳児健康診査終了後に保健師が発達面の相談を実施している。発達の心配がある児については、心理判定員による相談や小児科医による診察を行い、その結果、療育支援につなげている。一方で、必要性を説明しても療育支援につながらない児も存在する。その理由の一つに、療育支援利用までの手続き負担の大きさが挙げられる。療育支援申請時には、医師の意見書やサービス利用計画書が必要だが、保護者からは「かかりつけ医に相談をしたが意見書を書いてもらえなかった」「受診の予約がなかなか取れない」「サービス利用計画書の作成方法が分からない」などの声が寄せられている。

#### (2) 関係機関との調整

医師の意見書作成については、越谷市立病院との連携体制を見直した。5歳児健康診査の開始に向けて、市立病院へ出向き、療育支援へスムーズに繋げるための医師意見書の作成及び受診予約について協力を依頼した。また、サービス利用計画書に関しては、療育支援担当課である子ども福祉課と連携体制を新たに構築した。5歳児健康診査開始前に健診スタッフは、子ども福祉課より申請手続きの流れに関するレクチャーを受け、健診時には同席してもらい、療育が必要と判断された児および保護者に対して、その場で手続き方法を説明する場を設けた。

#### (3) 新たに構築した連携体制

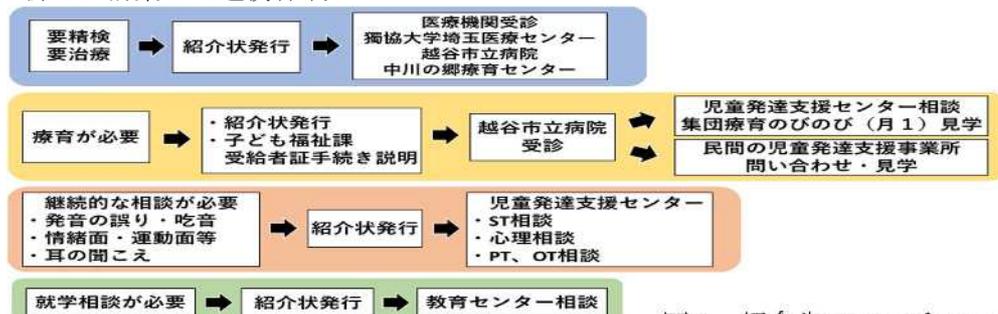


図1 紹介先フローチャート

本市では、5歳児健康診査を令和6年度を準備期間とし、令和7年度から開始した。対象は満5歳を超え、満5歳6か月未満の児であり、令和7年度の対象者数は約2317人である。実施方法は、事前アンケートによるスクリーニングでハイリスク者を抽出し、その対象に集団健診を行う2段階方式を採用している。集団健診の内容は身体測定、問診、集団遊び、小児科医師による診察、保健指導、心理判定員による相談である。健診の前後にカンファレンスを実施し、健診結果に基づき必要な関係機関に繋いでいる(図1)。療育支援が必要と判断された場合は、小児科医師より越谷市立病院宛の紹介状を発行し、受診案内を行う。

### 3 結果

表1 健診実施状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計
対象者数	194	190	200	211	212	242	185	185	1619
アンケート回答数	190	187	184	197	199	227	173	169	1526
健診対象者数	15	16	14	19	26	19	23	12	144
健診受診者数	7	9	8	6	9	8	7	9	63
受診結果	異常なし	7	7	7	5	4	4	7	46
	要精検	0	0	0	0	2	0	0	2
	要療育	0	2	0	1	3	3	0	11
	他機関紹介	0	0	1	0	0	1	0	2

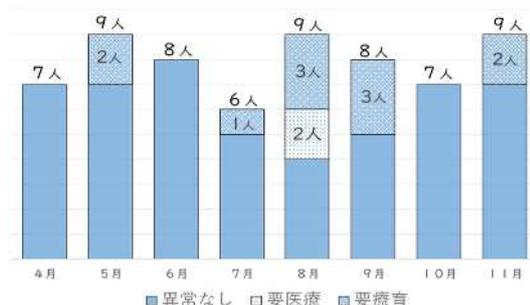


図2 健診受診者数と医療・療育案内者数



図3 保健指導の内訳

「かんしゃく」など日常の子育ての悩みを相談できる機会となった。健診を受けた保護者からは、「学校に行った後が心配だったので、その前に相談できて良かった」という声が聞かれた。

令和7年4月から11月まで実施した5歳児健康診査の受診者数は63名であり、そのうち療育支援が必要と判断され紹介状を発行された児は11名であった。(表1、図2) 紹介児のうち9名はすでに病院を受診済みである。療育支援申請の手続きに関しては、子ども福祉課から直接説明を受けることで、保護者の手続きへの不安が軽減され、関係機関へのスムーズな繋がりが実現した。また、療育支援が必要と判断されなかった児についても、「多動・落ち着きのなさ」

### 4 考察

現状、療育支援にスムーズに繋がらない課題に対し、5歳児健康診査の開始に合わせて越谷市立病院および子ども福祉課と調整し、申請手続きの負担軽減体制を構築したことは、課題解決の一助となったと考えられる。保健師が調整役となり関係機関への橋渡しを丁寧に行ったことで、保護者の不安や負担軽減が図られた。5歳児は生活習慣、友達関係、情緒の成熟など、家庭での心配が生じやすい時期である。健診では、「睡眠」「偏食」「登園しぶり」「かんしゃく」「多動・落ち着きのなさ」などの相談が多く寄せられ、保護者が安心して専門職に相談できる受け皿として機能した。今後は健診後のフォロー時期の設定や、スクリーニングで集団健診対象とならなかった児および保護者が相談できる場の構築などについても検討が必要である。

## 産後ケア事業の拡充を振り返って

狭山市保健センター  
平野 結香

## 1 概要

当市では、育児不安がある等の理由により支援を必要とする産後1年以内の母子に対して、心身のケアや育児サポート等を行い、産後も安心して子育てができるように産後ケア事業を実施している。平成29年度より宿泊型産後ケア事業を開始し、令和6年度から通所型産後ケア事業を開始し、委託先の拡充を行った。本報告では、産後ケア事業の拡充がもたらす影響や課題を明らかにし、当市での産後ケア事業の方針や運営に役立てることを目的として、令和5年度と令和6年度の産後ケア事業の比較を行った。

## 2 事業内容

令和5年度の産後ケア事業は、宿泊型1か所のみであったが、令和6年度からは宿泊型を2か所とし、また、新たに通所型を2か所で実施した。

表1 令和5年度と令和6年度の産後ケア事業内容

種類	令和5年度	令和6年度	
	宿泊型	宿泊型	通所型
対象者	産後2か月程度の母子	産後2か月程度の母子	産後1年以内の母子
施設種別	病院1か所	病院1か所 助産院1か所	助産院1か所 看護大学運営の事業所1か所
利用可能日数	7日間	7日間	5日間

## 3 結果

## (1) 産後ケア事業利用実績

表2 産後ケア事業利用実績

種類	令和5年度		令和6年度	
	宿泊型		宿泊型	通所型
申請者数	8名		44名	
利用者数	人数	実8名	実32名(併用者3名)	
	内訳		18名	17名
利用日数	延べ17泊25日	延べ49泊68日	延べ32日	
平均利用日数	2泊3日	2泊3日	2日	
母の平均年齢	30.1歳		33.5歳	
対象児の兄弟姉妹区分	第1子	7名	実22名(併用者3名)	
			15名	10名
	第2子以降	1名	実10名	
			3名	7名

## (2) アンケート結果

産後ケア事業を利用した方に、SMSでURLを送付し、電子申請での産後ケア事業の利用後アンケートを実施した。令和5年度は利用者8名中7名の回答、令和6年度は利用者32名中26名(宿泊型と通所型の併用者3名含む)の回答があった。

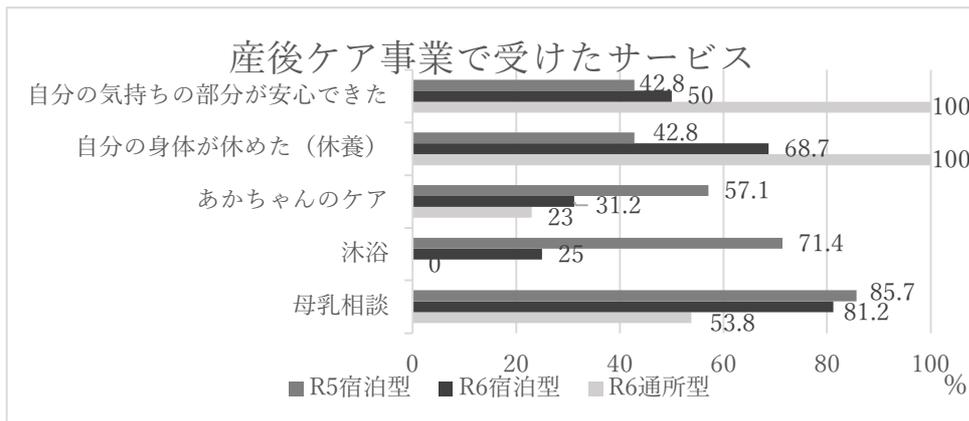


図1 産後ケア事業で受けたサービス

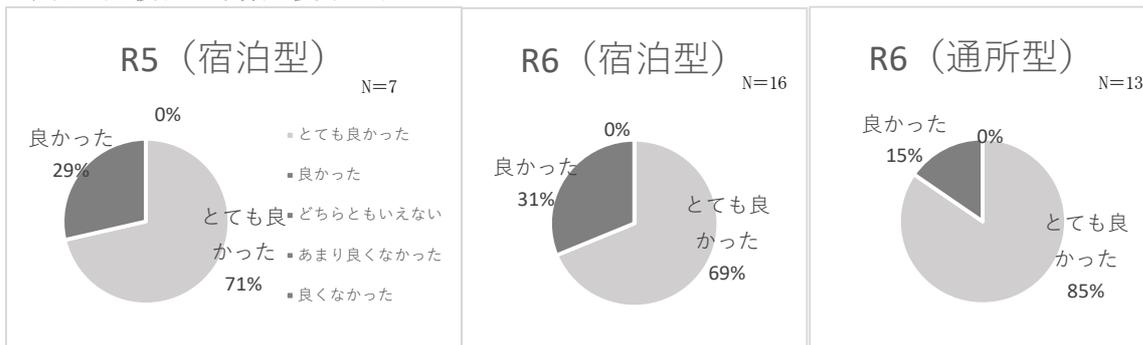


図2 産後ケア事業を利用しての評価

#### 4 考察

令和6年度に事業の拡充を図ったことにより、令和5年度と6年度を比較すると、利用者数は実人数8名から32名と増加し、利用延日数も17泊25日から、宿泊型49泊68日、通所型32日と増加している。全国的な産後ケア事業に対する認知度の向上に加え、新生児訪問等で積極的に当事業について周知したことで、利用者にとって当事業が身近になり利用増加につながったと考えられる。

利用の傾向としては、第1子では宿泊型の利用が多く、沐浴等の育児手技の獲得を目的とした利用が多かった。また、第2子以降では、通所型の利用が多く、休養やリラックスを目的に利用する方が多かった。また、実施後のアンケートでは、令和5年度・6年度ともにとっても良かった・良かったという回答のみで、利用した方の満足度は高かった。

課題としては3つあり、1つ目は産後ケア事業実施施設・利用者数が増加したことによる事務作業の煩雑化である。令和7年度は産後ケア事業利用券を導入し、各施設との調整や利用回数等の管理についての事務の軽減を図ったが、利用者への通知送付等、事務量は依然として解消されていないため、ICTを活用するなど、更なる事務の効率化が必要である。2つ目は安全管理である。国のガイドラインには、市町村が安全管理に関するマニュアルを作成し、事業者と市の双方で内容の確認をするところがあるが、当市では未作成であるため、利用者が安心安全に産後ケア事業を利用できるよう、事業所と協議しながらマニュアルを作成していく必要がある。3つ目は利用者のニーズに合った産後ケア事業の拡充である。令和6年度の産後ケア事業拡充により、第2子以降の方の利用が大幅に増えたが、兄弟児の預け先がない方や移動手段がない方は利用が難しい現状である。今後は産後ケア事業実施施設の増加や、訪問型産後ケア事業の導入など、更なる事業の拡充を図っていく必要がある。これらの課題に取り組み、産後ケア事業を必要とするさらに多くの母子が利用できる体制を整えていきたいと考える。



### (3) 乳幼児健康診査後のフォローアップについて

乳幼児健康診査後は、全ての記録を保健師が確認している。その記録の中で、発育発達、育児状況等、気になる点があれば、図3のとおり電話をかけ、必要時、面接、訪問を実施している。一方で、電話が繋がらない場合もある。保健師の介入が必要だと思われるが、連絡が取りにくい場合や相談のニーズが低く介入が難しい場合がある。その場合は、手紙の送付や所属先で様子確認を実施している。所属先と課題を共有し、対象者の困りごとや相談のニーズが高まった際に保健師が介入できるよう連携している。

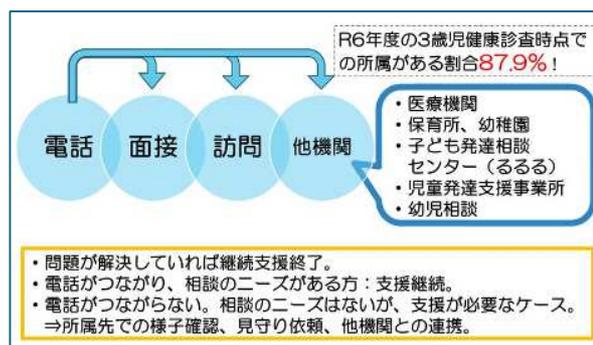


図3<健康診査後のフォローアップ体制>

### (4) 他機関連携について

#### ①保育所・幼稚園訪問

目的：児の健康面や育児状況で気になる点を共有し、よりよい支援の方向性を確認。連携強化。

方法：保健師が保育所・幼稚園と日程調整を行い、年1回又は随時、対面にて情報共有。

実績：昨年度は、市内236か所の保育所・幼稚園を9つのステーションでほぼ全数実施。

#### ②学校保健連絡会

目的：児の健やかな成長への支援づくり。課題のある児への早期かつ継続的な支援。

方法：年に1回実施。小中学校の養護教諭と保健師で集まり、対面にて情報共有。

実績：全ステーションで平成15年から現在まで継続中。今年度は小学校46校、中学校28校参加。

## 3 成果（取り組んでみての所感）

母子保健活動について、母子健康手帳交付時である妊娠期から専門職が面談を行うことで、リスクの早期発見ができ、迅速な支援に繋がっている。乳幼児健康診査について、フォローアップや未受診者訪問の実施により、支援が必要な児を把握することができている。また、3歳児健康診査では、唯一直接会える機会であるため、様々な情報を読み取りよりよい支援に繋がっている。他機関連携については、顔の見える関係性を大切にしているため、日々の業務でも連携がとりやすく、迅速な対応に繋がっている。また、他機関と連携することでアセスメントに多角的な視点が加わり、気になる児の経過を継続的に追うことができている。連携があることで就園や就学などの支援の切れ目が生じやすい時期に、細く長く途切れることなく支援が継続していると感じている。

## 4 まとめ

川口市は大規模自治体であり、乳幼児健康診査のフォローアップや未受診者対応は、保健師のみでは全数対応が難しい。健康診査後、方針を経過観察で終わらせず、児の困りごとに焦点を当て、地域全体での支援を目指したい。その実現には、他機関との顔の見える関係性を重視し、連携のさらなる強化が必要だと考える。最後に、今日まで積み重ねてきた他機関との関係性や取り組みの実績は、今後開始予定の5歳児健康診査にも活かしていきたい。

# 医療的ケア児研修会の工夫～支援者・当事者家族・事業所をつなぐ場づくり～

東松山保健所

○松浦彩佳 平井美香 澁川悦子 矢萩義則 荒井和子

## 1 概要

医療的ケア児支援法の基本理念にある「切れ目ない支援」の実現には、教育・保育現場での医療的ケア児の受入体制の整備が不可欠である。しかし、保育園で医療的ケア児を受け入れている市区町村は全国で約2割にとどまること<sup>1)</sup>から、医療的ケア児の教育・保育との連携は管内での地域課題の1つと考え、医療的ケア児の日常を知る研修会を実施した。本研修会は、支援者だけでなく医療的ケア児とその家族も対象とし、支援者と医療的ケア児家族が一同に会する構成で実施したため、その実践を報告する。

## 2 実施内容・結果

### (1) 研修会の工夫とその効果

研修会開催において実施した工夫とその効果を、大項目・サブカテゴリー・狙い・具体的内容・結果の5つの枠組みで整理した。(表1)

	大項目	サブカテゴリー	狙い	具体的内容	結果	通年
研修会前	計画	関係機関連携(会議実施)	専門家・行政・教育機関が地域課題と解決策を共有し、こども支援を一体的に考えることで、こどもが自分らしく育つ社会の実現を目指す	ハイブリッドで会議を実施。これまでのこども支援に関わる保健所の活動及び令和7年度計画を説明。本研修会講師から「知る」研修会の目的と内容を説明	医療的ケア児を理解する前に「知ってもらおう」ことを目標にすることを明確化し共有した。こどもの成長には状態や年齢で区分されない切れ目ない支援と地域のつながりが重要であることを再確認	前↓家庭訪問にて医療的ケア児と家族への個別支援の充実 当日↓声掛け 後↓家庭訪問にて思い聴取
		特別な配慮の必要なこどもたち	学区内の保健所に声をかけ、講師が所属する特別支援学校の見学を実施	特別支援学校見学	講師とより具体的な打合せを実施、更にそれを踏まえ、医療的ケア児に研修会の案内を訪問にて実施	
研修会当日	構成	特別な配慮の必要なこどもたち	関心の高い5歳児健診の研修会を同日午前で開催し、医療的ケア児への関心を促進	午前:5歳児健診推進のための研修会、午後:医療的ケア児を知る研修会(本研修)の2部構成	午前参加者47名、午後参加者37名、両方の参加者は7名(9%)であった。医療的ケア児を知る研修会のみ参加した支援者23名であり、医療的ケア児への関心の高さが判明	
		運営方法	交流促進	当事者にとって「自分たちを理解しようとしてくれる」という安心感の獲得 支援者は生活背景や希望の理解促進 支援者が医療的ケア児の個性や反応についての理解促進	医療的ケア児当事者と支援者が同じ空間で学ぶ設定 研修会終了後、医療的ケア児と支援者の交流機会の場設定	
	事務局	保健所間連携	当事者交流の幅の拡大 多機関連携による研修の質向上	坂戸保健所と共催で実施 講師の所属する特別支援学校学区内保健所(鴻巣保健所)の協力	坂戸保健所管内2家族、東松山保健所管内6家族の参加 保健所同士の交流・連携の場の創出	
		グループワーク運営	当事者家族の安心感と交流促進 スムーズなグループワークの進行	医療的ケア児等コーディネーターに医療的ケア児の家族交流会でファンリテータを依頼 支援者のグループワークの司会と書記を行政職に事前に依頼	医療的ケア児家族の感想では交流の機会が「すごくよかった」という意見が多く、安心して交流できていた。 どの支援者グループもスムーズにグループワークが進んでいた。	
	保育	体制・空間	親子分離により家族が研修会に集中できる機会の確保	保育を別室で実施	家族が研修会に集中できた。また親子分離が少ない医療的ケア児と家族にとって、親子分離の機会となった	
		外部協力	日頃のケアの延長として安全に保育を実施 3つの訪問看護事業所、事業所の交流・連携を推進	主に医療的ケア児を担当している管内3つの訪問看護事業所に保育を依頼	事故なく終了。また、事後アンケートでは当事者家族100%が安心して参加できたこと回答 それぞれの事業所の交流が計れ、意見交換の場となった。	
研修会后	振り返り	関係機関連携(会議実施)	講師、専門家、保健所、ファンリテーター、保育との立場から研修会を振り返り、共有することで、今後の研修会及び地域支援に活かす	オンラインにて会議を実施。事後アンケート結果の報告、研修会当日及び今後についての意見交換	保健所では得られない情報や意見を収集し、研修会の成果と課題を多角的に評価することができ、今後の地域支援の展開を共有できた。	

表1 研修会の工夫とその効果

### (2) 研修会内容

研修名 医療的ケア児を知る研修会

日時 令和7年8月28日(木)13時45分から16時00分まで

場所 東松山市民文化センター 1階第一会議室他(ハイブリッド、オンデマンド配信なし)

対象者 保育園・幼稚園・小学校教諭、保健・福祉等関係者、医療的ケアのある小児慢性特定疾病患者とその家族

内容 ①講演 特別支援学校肢体不自由児の教育活動と学校生活を知る

②グループワーク、交流会

(地域ごとの支援者グループ、年齢ごとの当事者家族グループ)

講師 埼玉県立川島ひばりが丘特別支援学校 特別支援教育コーディネーター2名

保育 別室にて実施 管内訪問看護事業所3か所3名、保健所職員2名による看護保育

### (3) 研修会結果及び考察

研修会には37名が参加し、所属の内訳は保育園・幼稚園が10人(27.0%)で最も多かった。本研修は保育園等での医療的ケア児受け入れ課題から始まったが、所属別で保育園・幼稚園の参加が多かったことから、保育園・幼稚園の関係者も医療的ケア児への関心を持っていることが分かった。

事後アンケート(92.0%)では、研修会の理解度は非常に深まった62.0%、深まった35.0%であり、満足度は非常に満足53.0%、満足41.0%であった。自由記載では、支援者からは「医療的ケア児の理解を深めたい」「医療的ケア児を知る機会となった」「みんなで考えていきたい」「所属する園でも環境を整えたい」、家族からは「安心して子どもを預けられた」「勉強になった」「交流できて色々な話をきけて嬉しかった」など、企画の狙いに沿った意見が多く寄せられ、研修が地域の支援者、家族にとって有意義な機会となったことが示唆された。

#### ア. PDCA サイクルに基づく事業展開

個別支援の中で「医療的ケア児の教育・保育との連携」という地域課題を抽出し、研修会の事業化を図った。そこで、研修会開催前・開催後に地域課題の共有とその解決のための研修会実施という位置付けを明確にするための会議を行ったことで事業目的の共有、事業評価、今後の支援に必要なことを導くことができた。

#### イ. 視点の転換

研修会のテーマを医療的ケア児を「知る」研修会という発想にしたことで、「まずは知ってみよう」と気軽に参加できたことが推察され、参加者からは「医療的ケア児の理解を深めたい」「みんなで考えていきたい」という理解促進への意欲を引き出せたと考えられる。

#### ウ. ネットワークの形成

研修会では、地域ごとの支援者、医療的ケア児と家族によるグループワークの時間を設け、講義後の交流から、学びや気づきを共有する時間を設けた。保育では、医療的ケア児の支援に入っている訪問看護3事業所に1名ずつの保育依頼を行ったことで、保育を通じた看護師間の交流の機会や支援者・保健所が日常の看護ケアを知る機会となり、個別支援の充実に寄与したと思われる。また、訪問看護事業所、保健所、当事者家族、研修会終了後に保育室に立ち寄った支援者等と様々な方向での交流が実現したことで、日常のケアを看護師から日々の暮らしを家族から説明するなど、この研修会の機会を通じた相互理解を促進できたと考える。このように、こどもの生活圏を考えた協働が実現したことは、地域全体で支援を進めるための重要な一歩となったことが考えられる。

## 3 今後に向けて

本研修を通じて、今後は二つの軸で取組が必要であると考ええる。

第一に支援者支援である。医療的ケア児の保育園等での受入れ開始や受入れ後の安全確保には、地域・医療・教育の連携が不可欠である。今後は、医療的ケア児の現場での受入れに関する課題を共有し、具体的な対応策を協議する場を設けることで、安心して入園・入学できること、地域の子どもとして受入機関と共にみんなで考え支援ができる体制づくりによる切れ目ない支援につなげることが重要であると考ええる。

第二に、当事者支援である。今回、医療的ケア児とその家族が孤立しないよう、当事者同士の交流機会に参加できた家族は、日頃の個別支援があったからこそ、研修会への参加がスムーズであったと考える。小児慢性特定疾病患者の個別支援を展開できる所内体制の構築も重要であると再認識した。交流機会の促進は、当事者にとっての情報交換や心理的支えとなるだけでなく、当事者の声を地域に届けることができる機会となるため、地域全体での切れ目ない支援の理解促進にもつながっていくものと考ええる。

これらの取組を通じて、医療的ケア児とその家族を含む地域の子どもとその家族が安心して暮らせる地域づくりを進め、更に日本一暮らしやすい埼玉に寄与していきたい。

### 【引用・参考文献】

1) 保育所等での医療的ケア児の支援に関するガイドラインについて 令和4年度 医療的ケア児の地域支援体制構築に係る担当者合同会議(令和4年9月30日、厚生労働省子ども家庭局保育課)

## 医療的ケア児を支える繋がりづくり ～医療的ケア児コーディネーターとの情報交換会を通して～

埼玉県南部保健所

○岸希美 酒井里菜 渡部京子 山本眞由美 安達昭見 川南勝彦

### 1 はじめに

医療的ケア児（以下、医ケア児）及びその家族に対する支援について、南部保健所では令和6年度から人工呼吸器等の医療的ケアを必要とする患児・家族が集い、日常の出来事やとりとめのない会話を楽しむ「よもやまサロン」を開催している。今年度は、脊髄髄膜瘤患児・家族も対象として実施した。8月開催の「よもやまサロン」（脊髄髄膜瘤対象）に参加した管内の医療的ケア児等コーディネーター（以下、医ケア児コーディネーター）からは、医ケア児支援の経験が少なくどのように支援をしたらよいか分からないと発言があった。また市障害福祉課からは、患児・家族の集いを開催したいが、対象者の選定が難しいとの声があった。

以上から、医ケア児の健やかな成長を図るため管内の医ケア児支援者同士を繋ぎ、情報共有し連携を強化する必要があると考え、「医療的ケア児に関する情報交換会」（以下、情報交換会）を開催した。情報交換会を通して、管内のネットワーク構築を図った一例として報告する。

表1 経過

### 2 経過

経過は表1のとおりである。

日時	内容	方法
令和7年5月	・小児慢性特定疾病受給者（脊髄髄膜瘤患児・家族）から交流会希望あり	窓口対応
令和7年8月	・「よもやまサロン」開催（脊髄髄膜瘤対象） ・情報交換会について、管内の医ケア児コーディネーター、市障害福祉課を中心に日程調整を行う	対面開催 電話・Microsoft Forms
令和7年9月	・参加機関へ開催通知送付 ・参加者へ事前アンケート実施	メール Microsoft Forms
令和7年9月末	「医療的ケア児に関する情報交換会」開催 ・参加者から普段の活動紹介 ・情報共有「患者・家族のニーズ把握」について	対面開催
令和7年10月	・事後アンケート	Microsoft Forms

### 3 実施内容・結果

#### (1) 事前アンケート

情報交換会を開催するにあたり、議題選定のため事前アンケートを実施した。今まで関わった個別ケースが抱える課題を参考に「患者・家族のニーズ把握」「関係機関との連携・役割分担」「就学について」「災害について」の項目をあげ、2項目選択式とし回答を得た。事前アンケート結果では、「患者・家族のニーズ把握」「災害について」の回答数が多い結果となった。また自由記載欄では、「医ケア児の把握方法について」と、「医ケア児コーディネーターや他機関と、医ケア児との繋がり方について共有したい」と回答があった。「よもやまサロン」での支援者からの意見や、事前アンケートの自由記載欄から、情報交換会では「患者・家族のニーズ把握」のため現状や課題について共有できることを目標とし、情報交換会を実施した。

#### (2) 情報交換会当日

9月末に南部保健所管内「医療的ケア児に関する情報交換会」を実施した。参加者は、管内の医ケア児コーディネーター、各市保健センター及び障害福祉課、地域センターカリヨンの杜の7機関（8名）であった。参加者の発言は表2のとおりであり、どのように活動していくか「医ケ

ア児支援に向けて模索している現状」が分かった。また「医ケア児の情報把握の難しさ」から、「関係機関との連携強化」を期待する意見があった。

表2 当日の参加者の発言（抜粋）

カテゴリー	参加者の発言（抜粋）
医ケア児支援に向けて模索している現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医ケア児コーディネーターとして、仕事をどのように行えばいいのかまだ分かっていない。</li> <li>・積極的に動けていないのが現状である。</li> <li>・患児、家族が集まる場を企画していきたいが、まだ動けていない。</li> <li>・ケース数が少なく経験が浅いため、場面ごとに保護者と考えている。</li> </ul>
医ケア児の情報把握の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医ケア児の把握のためアンケートを実施したが、個人情報の関係でどのように連携していけばよいか悩む。</li> <li>・サービスに繋がっていない人への情報収集が難しい。</li> <li>・医ケア児に関わるきっかけは、サービスを使うタイミングが多い。サービスがない人にも入院中から関わると良い。</li> </ul>
関係機関との連携強化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ケースを把握したら関係機関で共有し、早期に訪問できると良い。</li> <li>・課題を拾うことが難しいため、病院や訪問看護などに協力してもらい、自発的に教えてもらえるような仕組みを作っていきたい。</li> </ul>

### （3）事後アンケート

参加者8名全員から回答が得られ、全員が「今後の業務へ活かせる部分があった」と回答し、6名が「次回の参加を希望する」と回答した。自由記載欄の内容は表3のとおりであり、3つのカテゴリーが抽出された。集計結果から、支援者が抱える「悩みの共感」ができたことや、支援者同士で「ネットワーク作り」に向けて前向きな意見が伺えた。医ケア児支援に向けて模索している支援者が情報交換することで、1市だけでは得られなかった考えや取組を共有することができたと考えられる。また「関係機関との協働」に関する回答もあり、支援者同士が顔の見える関係を築くことが重要であると示された。

表3 事後アンケートの自由記載欄（抜粋）

カテゴリー	自由記載欄（抜粋）
悩みの共感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じ悩みを共有できた。</li> <li>・自分と同じような困りごとが聞けた。</li> <li>・他市の取組を聞いて参考になった。</li> </ul>
ネットワーク作り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなと顔合わせができた。</li> <li>・小さな地域だからこそ繋がりを持てると感じた。</li> <li>・困った時に、誰かに聞いてみようと思えた。</li> <li>・会うたびに顔が繋がっていくと良い。</li> </ul>
関係機関との協働	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなと一緒にできることを探していきたい。</li> <li>・今後もこういう機会で勉強していきたい。</li> <li>・ライフステージごとに必要なことも変化するため、事例を通して話し合い勉強していきたい。</li> </ul>

## 4 考察・今後の展望

今回の情報交換会は、南部保健所で企画した「よもやまサロン」に支援者が参加したことをきっかけとし、管内の医ケア児支援者のネットワーク構築を図るため開催した。当日の参加者の発言や事後アンケートから、支援者同士が顔を合わせて情報交換を行う機会となり、地域のネットワーク作りの一助になったと考える。

今後も支援者同士が繋がりを広げていくことができるように、保健所の広域的なネットワークを活かし、今回の情報交換会のような話し合える仕組みを継続して企画していきたい。